〈原著論文〉

国語科教育と文学教材（２）
── 三浦哲郎「盆土産」〈精読〉の試み ──

中　田　睦　美*

Japanese Language Teaching Materials and Literary Teaching Materials（２）: Tentative Assumption of Intensive Reading “Bonmiyage (Tray Souvenir)” by Tetsurou Miura

(NAKATA Mutsumi)

はじめに

本稿で採り上げるのは、三浦哲郎の短編小説「盆土産」である。同作は雑誌「海」（昭54/1979・10、中央公論社）に発表され、単行本『冬の雁』（昭55/1980・11、文藝春秋）に収録・刊行された。「盆土産」が初めて教材に採録されたのは昭和62年（1987、中学『国語２』光村図書）で、以来、ごく一時期を除いて今日まで掲載され続けており、中学国語の定番文学教材の一編といってよい。

今回、主眼とするのは、〈教材〉という枠に捉われず、叙述の背景や深層も考慮する精緻な読解の試みである。読書の楽しみを消費する一般読者（レクトゥール）ではなく、作品の内奥まで深く踏み込む精読者（リズール）としての読解である（注１）。むろんこれまでも詳細かつ丁寧な読解例がなかったわけではない。たとえば教授指導書なども詳細な読解例だが、指導書の性質上、教室での授業進行を念頭に、生徒たちの理解力なども勘案した読解となる。いわば教育現場（教室での授業）の目的に添う一定の〈制約〉の上に成り立つ読解、すなわち〈教材的読解〉と呼ぶべきものだろう。しかし、小説それ自体は予め教材採録を前提に執筆されたわけでなく、本来は自立的に創作された文学作品である。したがって、文学教材の読解には、教室を前提とする〈教材的読解〉とは別に、〈制約〉なしに本文を読み込む〈文学的読解〉もあり得る。本稿は後者を主眼とするため、結果的に〈教材的読解〉の範疇を超えた読解となる部分もある。ただし、二通りの読解を分ける線引きは明確ではないし、その読解が教室で適切

＊近畿大学教職教育部教授

〔キーワード〕出稼ぎ、ナラトロジー、えびフライとえんびフライ、方言、心内語

か否かは教師や生徒のリテラシーなども関係してくるので判断が難しい。こうした問題については今後の課題だが、〈教材〉だからといって生徒の理解力を予め推量し、作品に表記された字義通りの手堅い読みに終始するのは、自由な想像力の涵養を目的とする〈文学教材〉本来の意味を削ぐことにもなる。ともあれ、今回は〈文学教材〉も元々は〈教材〉以前に〈文学〉であったことを念頭に精読の読解例を試みる。むろん、〈教材〉的要素をすべて排除するのではなく、授業進行に有益な要点はそのつど摘記する。

一、作者の来歴

作者三浦哲郎は、中編「忍ぶ川」（「新潮」昭35/1960・10）で第44回芥川賞を受賞（昭36/1961下半期）、これが文壇デビューの出世作となった。その「忍ぶ川」にも一端が見られるが、後述のように彼の生い立ちは大変痛ましいものであった。作者の来歴を知ることがテクスト理解に直結するわけではないが、三浦作品にはしばしば作者の生い立ちの影が揺曳する。したがって、その来歴に（授業内で）触れることは、三浦文学を生成した土壌に分け入る一歩であり、テクスト理解に奥行きをもたらすと共に様々な背景（生育環境）を抱える現代に生きる子どもたちを間接的に励ますことにもなる。

三浦は、昭和６（1931）年３月16日、青森県八戸市三日町十三番地に生まれた（注２）。父は壮介、母はいと、兄に文蔵、益男、姉に縫、貞子、きみ子がおり、六人兄妹の末子だった。生家は八戸市で屋号「丸三」という呉服屋を営んでいた。彼が満六歳の誕生日に次姉が青函連絡船から津軽海峡に入水自殺、同年夏には長兄が失踪、翌年秋には長姉が服毒自殺をしている。旧制八戸中学三年時に終戦を迎え、一家は父の郷里一戸郡金田一村湯田に転居する。昭和24（1949）年、新制八戸高校を卒業、早稲田大学政経学部に入学するが、翌年春、彼の面倒を見ていた次兄が失踪したため中退を余儀なくされた。以後の数年間は不幸が続く家系の血に悩まされる。八戸に戻って助教諭を勤める傍ら太宰治・井伏鱒二・上林暁らの文学に親しみ、一年後（昭27/1952）、一戸の実家に戻った際、自身の血を直視・対峙してこそ生きる道も開けると考え、昭和28（1953）年、早稲田大学文学部仏文科に再入学、仲間と同人誌「非情」を創刊して小説を書き始める。同誌第三号に発表した「遺書について」が機縁となって井伏鱒二の知遇を得た。昭和31（1956）年（25歳）、海老沢徳子と結婚するも大学を卒業するまでは別居とし、妻は一戸の家で両親や姉と共に暮らした。昭和32（1957）年３月、大学を卒業、妻と同居するも就職せずに文筆活動に入ったものの困窮、父の病と死（昭33/1958・７）をきっかけ

に夫婦で帰郷、のち上京したが熱病のため再び帰郷（昭34/1959）、姉きみ子の世話になる。同年６月、長女晶子誕生。昭和35（1960）年春、小沼丹の推輓で東銀座のPR誌編集の職を得て単身上京、まもなく妻子を呼び寄せ、再起の記念に「忍ぶ川」を執筆、これが先述の芥川賞受賞作となり、以後、順調な作家生活を送り、多くの作品を発表。平成22（2010）年８月29日に没した。

〔作者の経歴について〕

上述のように、作者三浦は、姉兄たちが次々と無惨な自死や失踪を重ねた。そのため彼は自身を呪われた不幸な血筋だと恨み、煩悶し、深く思い悩む。しかし、自己の身体に流れる血はどう足掻いても逃れられない。彼はそこで自暴自棄にならず、絶望することも逃げることもせず、その事実と正面から向き合い、それを文学（創作）の主題とすることで自身の生きる道を切り開いた。今日、生徒の中には複雑で極めて理不尽な家庭環境に育ち、ひそかに悩んでいるケースも少なくない。だが、三浦は家庭内の劣悪な生育環境などよりさらに深刻な血筋という逃れ難い問題に苦しめられ、翻弄された。三浦の抱え込んだ深刻な問題とそこから脱却した経緯は、さまざまな問題にひそかに悩む生徒たちへの励みや生きるための先例のひとつとして参考になりはしないか。生徒らが絶望したり自棄（やけ）になったりと負の感情に押し潰されそうな時に、三浦の人生を知ることで誰に言わずとも生徒が自身を静かに鼓舞する契機となりはしないか。文学国語を通して作家来歴を学ぶ意義はここにある。

二、作品の概要

まずは「盆土産」の概要を見ておこう。本作は三章構成の短編小説である。原文の章立て「１」「２」「３」は教材の慣例で数字に代わる形での〈一行空き〉に改められている。本稿では原文「１」を第一場面、同じく「２」を第二場面、「３」を第三場面と表記する。なお、初出・初刊の原文と教材本文の間に異同はない。

物語の舞台は自然に包まれた山間の寒村である。具体的な地名はないが、作者が戦後直後に移住した父の郷里・一戸の湯田がモデルかもしれない。

第一場面の冒頭は、小学校三年生の主人公が、父の好きなそばつゆのダシに使う雑魚捕りをする川べりの場面だが、頭の中は「えびフライ」で一杯だった。というのも、昨夕、東京に出

稼ぎに出ている父からの速達で、急の帰省が伝えられ、短い文面に記された「土産」の「えびフライ」が正体不明の代物だったからだ。彼は「えびフライ」と口にすると必ず「えんびフライ」となり、姉がその訛りをたしなめるが、姉自身も「ザッコ」を「ジャッコ」と訛る。姉や祖母もまた「えびフライ」が何物なのかを知らなかった。

第二場面は、まず帰省した父の姿が描かれる。帽子を斜めに被（かぶ）る癖の父の額の一部が生白く、それは東京の工事現場で装着したヘルメットの跡らしい。土産の紙袋でまず目についたのは初見のドライアイスで、その気化に驚き、中身のえびも見たことのない大きさに驚く。夕食のえびフライは父自身が揚げ、主人公と姉に二尾ずつ、父と祖母に一尾ずつ分けたが、歯のない祖母はフライの尻尾で喉が詰まりかける。

第三場面は、翌日の午後、一家が揃って母や祖父の眠る共同墓地に出掛け、盛り土に小さな石を置いた墓に参るが、主人公は祖母の念仏から「えんびフライ」の語を聞く。翌日のそばつゆを気にする主人公に対し、父は心配無用、休暇は一日半なので今夜の夜行で東京に戻ると言い、最終バスで村を後にする……。

要約すれば、「盆土産」は東北地方らしき山間の寒村を舞台とし、出稼ぎから帰省した父の土産品「えびフライ」という〈未知との遭遇〉をめぐって、その戸惑いや波紋を微笑ましく描き、同時に束の間の一家団欒を噛み締める家族愛を描いた物語と一応は言える。ただし、その背景には、出稼ぎなしには生活が成り立たない貧しい寒村の暮らしや都鄙（とひ）の格差や出稼ぎの厳しさなど、さまざまな社会問題も揺曳している（注３）。

三、「盆土産」におけるナラトロジーの問題

「盆土産」は、三段落の場面構成や、えびフライのもたらす波紋、家族像、方言をめぐる挿話など、さまざまな要素で巧緻に仕立てられた好短編である。その一方、読解の前提となる物語の語りは、一見単純そうに見えて実は相当に複雑な問題を内包している。以下、そうしたナラトロジーの問題を三点の【視点】に焦点化し、考察を加えてみたい。

【視点１】主人公／語り手

本作の〈語り＝ナラトロジー〉についてはすでにいくつかの先行研究がある。たとえば、加藤郁夫（注４）や昌子佳広（注５）は、この〈語り〉が「二層」性を有するとし、その語り手が〈小三の息子／大人になった息子〉が綯（な）い交（ま）ぜになっていると指摘する。黒田俊太郎・幾田伸司（注６）は、その「二層」性を認めた上で、物語全体に「（語り手の）一人称の主語は一

度も出てこない」ことや「語り手を男性とする根拠は本文には何一つなく」「性別の両義性」にも注意すべきことの二点を指摘している。ただし、黒田・幾田論には問題提起はあるものの、その考察や解答は見られない。

そのため、ここではまず語り手の「性別」を検討してみよう。最初に冒頭場面の釣りの様子が男児らしい様子であること、次に方言をめぐるやり取りで姉の口調が弟扱いらしいこと、また喜一から「えびフライって、何せ」と問われ、心内語で「それが知りたければ家に来てみろ」の言い回しが少年口調であること、末尾の見送り場面で父が主人公の頭を手荒く揺さぶりつつ「ちゃんと留守してれな」との言葉は、年少ながら長男＝家長として自分（父）の留守中の家をしっかり守れとの申し渡しと思えること、以上から語り手の主人公は小学三年（四年生喜一の「一学年下」）の男子とみてほぼ間違いない。

次に、なぜ物語全体に「一人称の主語は一度も出てこない」のか。たとえば一人称の主語が「私」「僕」などの標準語だとすると、東北地方らしき寒村を舞台とし、方言も混じる作品世界のローカリティに馴染（なじ）まない。逆に一人称の主語が方言であると、それに準じて語り全体（心内語と重なる地の文）も方言で語る必要が生じ、叙述が複雑となり、物語世界が特定の色に染まってしまう。また、この〈語り〉には加藤ら（注４参照）の指摘する〈小三の息子／大人になった息子〉といった時間的「二層」性に加え、〈方言と標準語〉の言語的「二層」性も内包されており、その二層性が重層する複雑な語りを一種類の特定の主語で叙述するのは困難である。それゆえ、あえて主語を示さず語り手と視点人物の一体化で語りを強化しつつも主語に縛られないフレキシブルな語りを作者の三浦は選択したと思われる。

【視点２】〈語り〉の複雑な内的構造

前述のように、本作の語りには時間的「二層」性に加え、方言と標準語の言語的「二層」性も内在している。さらに、後述のように主人公は方言＝訛りのせいで「えびフライ」のつもり（意識）でも「えんびフライ」としか発声できない。つまり、本作の語りには、時間的・言語的な「二層」性の重なりに加え、意識と発語の分裂も内在している。そして、この複雑な内的構造を持つ〈語り〉をさらに難しくしている別の要素もある。

ひとまず〈小説のナラトロジー〉を論じた一書（注７）を参照してみよう。たとえば同書中で大岡昇平の「野火」における〈語り〉の「回想と現在」を論じた田畑雅英は、初出稿にあった導入部が改稿後に削除された経緯について次のように述べている。その導入部とは、レイテ島の俘虜病院に居た奇妙な患者田村を紹介する「私」の述懐で、以後の語り手である「私」が

実はその田村当人であることが明示されている。

導入部の削除は、「語る」現在と「語られる」過去という二層の時間関係を捨象するのではなく、その時間関係を開示するプロセスの上で過去の物語が語られるという結果を生んでいる。しかも、その開示のプロセスは、二層の時空の隔たりを明らかにすることによって物語全体に安定をもたらしてゆくのではなく、むしろ逆に、現在の時空の開示が、過去の時空の確かさを揺るがせ、その輪郭を不明瞭にしてしまう。

「野火」の精妙な「二層の時空」をめぐる分析の当否は暫らく措く。上記引用に倣えば、〈「語る」現在〉は「盆土産」の「大人になった息子」の現在に相当し、〈「語られる」過去〉は「小三の息子」の過去に相当する。ただし、「盆土産」が「野火」と異なるのは、〈「語る」現在〉すなわち「大人になった息子」の「現在」が何ひとつ語られず、具体的な状況が不明なことである。この〈「語る」現在〉の不明（空白）は、物語を読む読者の立脚点を不安定にし、そのため読者は〈語る「現在」〉の空白に代わる基軸として〈作者〉の存在を想定しがちとなる。だが、この〈作者〉とおぼしき存在が時として〈語り〉＝叙述を混乱させる。たとえば、本作では地の文＝「大人になった息子」の心内語が〈標準語〉で叙述され、「小三の息子」の発語（発声）が〈方言〉であるのが〈原則〉となるはずだが、その〈原則〉は必ずしも守られていない。

【視点３】「えびフライ」と「えんびフライ」

作中には「えびフライ」と「えんびフライ」をはじめ、その類語が頻出する。父親からの盆土産の正体である未知の食品「えびフライ」への興味と、その美味しさに魅了された主人公の意識が物語の主軸である以上、その関連語や類語の頻出は当然といえる。

重要なのは、前述のように主人公は意識上（心内語）では「えびフライ」と認識していても、いざ発声（発語）すると「えんびフライ」になることである。姉が窘（たしな）めても「何度繰り返しても直らない」。これは英語学習などを想起すれば容易に想像がつくように耳や目を通した脳の認識と身体反応の発音（発語）の齟齬であるが、問題は方言と標準語を使い分ける叙述が適切でない場面があることだ。

たとえば、冒頭第一行目の「えびフライと、つぶやいてみた。」の叙述については次章「四」の【読解のポイント①】で詳述するが、ほぼ同様の描写が第一場面の中盤にもある。

それは、父親がわざわざ東京から盆土産に持って帰るくらいだから、とびきりうまいものにはちがいない。だからこそ、気になって、つい、／「えびフライ……」／と、つぶやい

てみないではいられないのだ。

上記の下線部は冒頭一行目とほぼ同じ叙述だが、引用符「」で括られた直接話法である。冒頭部は引用符がないので地の文に同化した心内語ともみなせるが、上記の引用部は引用符で括られた上に「つぶやいてみないではいられないのだ」と強調されてもいるので、実際に声に出した「つぶやき」と読むのが自然だろう。だとすると、ここは「えびフライ……」ではなく、「えんびフライ」と叙述されるべきであろう。同じ疑問は第二場面の中盤、次の場面にも指摘できる。

「父っちゃ、帰ったてな？」／（中略）／「んだ。」／とうなずいてから、土産は何かときかれる前に、／「えびフライ」と言った。喜一は気勢をそがれたように、口を開けたままきょとんとしていた。／「……なんどえ？」／「えびフライ。」／「えびフライって、何せ。」／それが知りたければ家に来てみろ。そう言いたかったが（以下略）／「なんでもねっす」／と通り過ぎた。

上記引用の下線部、二行目の「『えびフライ』と言った」と三行目の「えびフライ。」は、喜一と主人公の〈対話〉による実際の発声であり、「小三」主人公の発語は当然「えんびフライ」と訛ったはずだが、標準語の「えびフライ」と叙述される。先の第一場面中盤の例も同じだが、本来なら方言であるべき語りがなぜ標準語となるのか。

それは、前述した〈語る「現在」〉の不明（空白）が原因と思われる。〈語る「現在」〉の空白は、語りの基軸の安定性を失わせ、そのため物語を読む読者の基軸（立脚点）も不安定となり、空白の代替として〈作者〉の存在が浮上する。つまり、語り自体の基軸（原則）よりも作者＝書き手の心情が支配的となり、作者に近い「大人になった息子」の心内語（標準語）が叙述として優位になってゆく。その結果、「小三の息子」の過去を語る〈語り手〉に代わって〈書き手（作者）〉が回想主体となり、本来なら方言となるべき叙述も標準語に変換される。つけ加えれば、前出の「小三の息子／大人になった息子」という語りの時間的「二層」性は、言語的には「方言の世界／標準語の世界」の二層である。本作でいえば「大人にな」るとは〈方言〉世界を脱して〈標準語〉の世界に馴致されることで、それは子供時代の良さ（幸福）の喪失をも意味する。したがって、本作の「大人」の〈標準語〉には常に子供時代を喪失した哀しみが内包されている。そうした情感（哀感）の凝縮した作者のまなざしが作品内（テクスト内）に前景化することで〈標準語〉に傾斜しがちになるともいえよう。

なお、以下の各章において、星形（★）で示す箇所は、作品の流れを繋ぐものである。

四、第一場面の読解ポイント

物語は、何の前触れも説明もない次の一行でいきなり始まる。

【引用１】 えびフライ、とつぶやいてみた。

きわめて唐突なこの作品の幕開けをどのように考えたらよいのだろうか。

【読解ポイント①】冒頭第一行目

実はこの一行の後に「足元で河鹿が鳴いている。腰を下ろしている石の陰にでもいるのだろうが……」といった川沿いの状況が後追いの形で説明される。加えて、この「つぶや」きは「声にはならぬように気をつけ」ると追記され、しかも直後には「えびフライ。発音がむつかしい」とあり、さらに後に方言＝訛りのため主人公は何度繰り返しても「えんびフライ」としか発音できないとある。つまり、冒頭の「えびフライ、とつぶやいてみた」の一文は、実際に発声された「つぶやき」ではなく、語り手の意識に浮かぶ〈心内語〉をあたかも発声したかのように記す、いわば〈擬態〉の叙述といえる。もし実際の発声であれば「えんびフライ、とつぶやいてみた」とあるべきところを、半ば〈地の文〉に溶解する叙述としたのである。この冒頭の一行が孕(はら)む厄介さは、「盆土産」のナラトロジー（叙述＝語り）が見かけと違って一筋縄ではいかぬ複雑な叙述であることを示唆している。

続いては、主人公の弟と姉の〈訛り〉をめぐるやり取りの場面である。

【引用２】 えびフライ。さっき家を出てくるときも、つい、唐突につぶやいて、姉に、「まぁた、えんびだ。なして、間にんを入れる？エンビじゃねくて、えびフライ」と訂正された。自分では、えびと言っているつもりなのだが、人にはえんびと聞こえるらしい。それが何度繰り返しても直らない。

けれども、そういう姉にしても、これから釣ろうとしている川魚のことを、いつもジャッコと言っている。分校の先生から、本当は雑魚と言うのだと聞いてきて、「ジャッコじゃねくて、ザッコ。」

と教えてやっても、姉はジャッコというのを止めない。

【読解ポイント②】方言／訛り

「えび（海老）」を「えんび」としか発音できない弟、「ザッコ＝ザコ（雑魚）」を「ジャッコ」と発音し続ける姉。二人は、頭の中では正しい発音を認識しつつも、実際の発音では訛り（方言）を脱することができない。〈正しい発音〉＝標準語を「造作もない

こと」とする都会人は、〈訛り〉のある地方人を鈍重な輩と見下すかもしれないが、〈訛り〉は、聴覚や視覚を通じた脳による認識と別種の身体反応である。つまり、方言＝〈訛り〉は原初的な身体性の産物、土地の風土や生活に密着した（根づいた）根源的な身体感覚の発現といえる。逆に言えば、〈訛り〉のない〈標準語〉の都会人は、そうした根の深い土着の身体感覚を喪失した人々ともいえる。紙数の乏しい短編で作者の三浦が姉弟二人の方言に筆を費やすのは、そうした身体内部の深層に根づく感覚の薄れた都会人にどこか根っこのない脆弱さを見出し、方言の重要性を感じていたからではないだろうか。

【読解ポイント③】**えびフライの種明かし**

作者は、「えびフライ」とはどのような代物なのか、その正体をすぐには明かさない。冒頭で主人公のつぶやく「えびフライ」を呈示しながら、物語は雑魚捕りの場面や姉弟の方言をめぐる対話をひとしきり語ったあと、第一場面も半ばを過ぎてようやく、それが父からの速達にある盆土産の品だと明かされる。「えびフライ」を〈謎〉の呪文のように繰り返しながら、その由来（正体）を先延ばしにする展開は、読者の興味を先へと繋げてゆく作者の巧妙な戦略だといえる。

★昨夕、郵便局の「赤いスクーター」が届けた父からの「速達」を受け取ったとき、家族はなぜか「ひやり」とし、文面を見てようやく安堵する。

【読解ポイント④】**父からの「速達」**

「東京から」の「速達」に「家中でひやりと」するのは、「速達」が尋常ではない連絡なので一瞬にして緊急事態を思い、すぐに「父の現場で事故でもあったのではないか」と心配したからである。それは出稼ぎ労働者の働き場所がいかに危険の多い苛酷な工事現場だったかを物語る。そして、家族がすぐに「事故」を連想して「ひやりと」したのは、以前から出稼ぎの人々の事故が頻発し、新聞等でそうした情報に日常的に接していたからであろう。もしかすると、近隣の知り合いに出稼ぎ現場で事故に巻き込まれた例があったのかもしれない。そんな家族の心配をよそに速達の封筒には「伝票のような紙切れが一枚入って」おり、正月休みには「今年の盆には帰れぬ」との話とは違って「盆には帰る。十一日の夜行に乗るすけ」とあった。わずか「一日半」の休暇であっても夜行列車やバスを乗り継ぎ、遠路はるばる帰郷する父の強行軍は、家族や村に対する愛着の深さを物語る。ちなみに日付が迫った速達の連絡は、主人公の家に電話がないこと、この貧しい寒村には総じて文明の利器が乏しかったことを暗示している。

★速達の短い文面の後半には「土産は、えびフライ。油とソースを買っておけ」と簡潔に記されていた。

【読解ポイント⑤】**謎の「えびフライ」**

この「まだ見たことも食ったこともない」未知の食物「えびフライ」は、主人公をはじめ家族を「心もとな」い不安に陥れる。姉は「黙って自分の鼻の頭でも眺めるような目つきをし」、主人公の問い掛けに祖母は言葉を濁して「……うめえもんせ。」とだけ答える。これは未知の食べ物が到来する家族の当惑や困惑をユーモラスに描いた巧みな描写である。えびフライは、今でこそ全国にありふれた周知の食品だが、当時の山村では全くの〈未知との遭遇〉であり、それにどのように対処してよいのか分からないための波紋を生む。「えびフライ」というエイリアンの登場は、一家を揺るがす〈事件〉であり、外部からの刺激的な新風でもあった。この場面は父が手にする未知の土産を待ち侘びながら、想像を膨らませ一家内がソワソワとする空気をリアルかつ巧みに描いている。

五、第二場面の読解ポイント

第二場面は、以下のような出稼ぎから帰省した父の姿の描写で始まる。

★父親は、村にいる頃から、うさぎの毛皮の防寒帽でも麦わら帽でもあみだかぶりにする癖があったが、今度も真新しいハンチングのひさしを上げて、はげ上がった額をまる出しにして帰ってきた。見上げると、その広い額の横じわから上のほうは、そこだけ病んででもいるかのように生白かった。

【読解ポイント⑥】**父のハンチングと額の生白さ**

父の「真新しいハンチング」は、後述（【読解ポイント⑧】）のようなバブルのおこぼれに少しだけ与かったプチ贅沢であろうが、同時に都会帰りのオシャレをひけらかすプチ自慢でもあったろう。それはまた、父の無意識の都会化すなわち潜在的な棄村（家離れ）の兆候かもしれない（注８）。そのハンチングの下の額に目立つ「生白」さは、帽子を斜めにかぶる父の癖に反し、工事現場ではヘルメットを深くまっすぐに着用する義務を示し、日焼けをしなかった箇所である。父の〈癖〉を許さぬ管理は、一面で〈父らしさの喪失〉であり、そのため「病んででもいるかのような」生白さと表現されたとも考えられる。ヘルメットの厳重な着用義務は、工事現場が危険の多い苛酷な労働環境でもあることや、目立つ額の「生白」さは逆に陽ざしの強い戸外での苛酷な長時間労働などを意味している。

出稼ぎの労働の苛酷さをあれこれ説明するのではなく、額の「生白」さだけで父の置かれた境遇を象徴的に物語る描写の巧みさにも注目したい。

【読解ポイント⑦】**物語の基盤〈出稼ぎ〉**

上述のように、物語の基盤となっているのは、主人公の父が〈出稼ぎ〉に出ているという事実である（注９）。冒頭で主人公が父を迎える準備（そばつゆの原料となる雑魚釣り）を急ぐのも、謎の「えびフライ」やドライアイスに戸惑うのも、それらから生じる種々の波紋も、元はといえば、父が〈出稼ぎ〉で村を離れ、〈外部〉（東京）に出掛けて帰還するという〈移動〉ないし〈越境〉がもたらす波紋である。それゆえ物語の基盤である〈出稼ぎ〉について理解しておく必要がある。本作では物語の具体的な舞台も時代背景も明記されてはいないものの、登場人物たちの〈訛り〉のニュアンスから作者と縁の深い青森県など東北地方が父の帰還する場所と考えられる。さらには父親の東京（とおぼしき地）への「出かせぎ」も、東北が寒冷地で貧しい土地柄が多く、昔から現在まで季節労働の〈出稼ぎ〉の多さを示している。特に農閑期の出稼ぎは当たり前で、そうした生活スタイルは今日にも及んでいる。

以下、物語の基盤である「出稼ぎ」の歴史的背景を一瞥しておこう。

【読解ポイント⑧】**〈出稼ぎ〉の歴史**（注10）

敗戦直後の昭和22（1947）年、ＧＨＱが主導する農地改革によって大地主の解体が進み、小土地所有者による自作農体制推進の成果は、ひとまず戦後混乱期の雇用や食料供給の安定を促した。しかし、時代が下るにつれ、苛酷で実入りの少ない農業では兼業が増加、労働力はしだいに減退・流出し、結果的に日本の食糧自給率が低下する。そうした中、戦後農政史の大きな転換点となったのは、昭和36（1961）年に制定された農業基本法（昭和36年６月12日、法律172号、平成11年廃止）である。この法律は「農産物の価格の安定及び農業所得の確保を図ること」そして「農産物の流通の合理化並びに価格の安定を図ること」を目的とすると謳われたが、実態は欧米に比して大きく遅れていると目された「農業の近代化・合理化」を進めることで、「農家の経営規模を拡大して自立経営の定着」を図ろうとするものだった。だが、これは逆に中小農家の切り捨てを加速させ、機械化のための借財の負担増を招き、却って「出稼ぎ」の増加を招くとともに、離農による都会生活への移住を後押ししたのだった。たとえば農林水産省「農業就業動向」（のち「農業構造動態調査」と改称）や同じく「農林業センサス」によれば、1960（昭35）年から1975

（昭50）年にかけて農業専業従事者は1,310万人から657万人に減少したのに対し、兼業従事者は637万人から867万人へと増加、とりわけ出稼ぎ形態の兼業従事者は1960（昭35）年から65（昭40）年にかけて18万人から55万人に急増している。

【読解ポイント⑧】を見てきた上で、「盆土産」作中の父親の場合、上記の大きな流れの中、その「出稼ぎ」がいつ頃で、また、どのような労働環境にあったと考えられるだろうか。

【読解ポイント⑨】**父の出稼ぎ**

上記の出稼ぎの急増は、高度経済成長の好景気に加え、東京オリンピック（1964/昭39）を目前に控えた大規模な都市改造やオリンピック関連施設の建造が急がれた状況を反映している。これら無数の工事現場が多くの労働者を必要とし、そのため賃金も高騰して出稼ぎバブルともいえる状況を生み出した。日本国内の「出稼ぎ」史上、最も突出したケースで、1950（昭25）年代後半から60（昭35）年代中頃における「東京」への「出稼ぎ」はそのピークであった。「盆土産」の父には突出したバブルの気配は見えないが、盆休みがわずか「一日半」だけなのは、出稼ぎ先が多忙を極める工事現場だったことを示す。父の「真新しいハンチング」もそんなバブルのおこぼれに与かるプチ贅沢だったと思われる。いずれにせよ、「盆土産」の時代背景である父の上京時期は〈出稼ぎバブル〉となった1950（昭25）年代から60（昭35）年代前半の頃と考えてよさそうである。

続いて、父の差し出した「土産の紙袋」は〈玉手箱〉よろしく主人公たちには未知の世界（えびフライやドライアイス）を現前させる。現在はテレビやソーシャル・ネットワークの普及で都市と地方との情報格差が縮まり、生活も平準化されてきたが、つい半世紀前まではこうした〈未知との遭遇〉が都鄙のリアルな格差を象徴するものだったのである。息子と娘にドライアイスや「冷凍食品　えびフライ」の説明をしてみせる父は、物知りな一家の大黒柱として都会の風を運んでくる畏怖すべき使者でもあった。

午後遅く、谷川で冷やすビールを引き揚げに行く途中、主人公は一学年上の「隣の喜一」に出会い、言葉を交わす。喜一の着ている「真新しい」Tシャツは、同じく出稼ぎに出ていた彼の父が盆休みで帰省したシルシの土産である。この寒村では一家の主人（父たち）が出稼ぎに出るのは一般的で、彼らがお盆には万難を排して帰村するのだ。

【読解ポイント⑩】**お盆の帰郷**

主人公の父が強行軍でわざわざ帰省したことには、お盆に帰郷することの重みが感じられる。次章（第三場面）の墓参シーンにも見られるが、お盆こと「盂蘭盆会（うらぼんえ）」は、祖先や

故人の霊を迎える供養の風習であるが、肩を寄せ合って生きる村落共同体や家族にとって、精神的一体感を継続させる極めて重要な精神的エートス（ethos、規範）であった。だからこそ喜一や主人公の父たちも多少の無理を押しても〈盆休み〉に帰村するのである。

父の帰村前日に出会った一つ年上の喜一から父の盆土産を尋ねられた主人公は「えびフライ」と答えるが、喜一は「……なんどえ？」「……えびフライって、何せ。」と不思議そうに尋ねる。しかし、主人公は未知の土産の説明に困ると同時に、折角の珍しい土産を見せるのも、分け前を強請（ねだ）られるのも惜しいと感じて子ども心に瞬時に考え直し、「なんでもねっす」と言って「通り過ぎ」る。お盆での帰郷とはいえ、遠方の出稼ぎ先から「速達」に追記まで付して大黒柱の父が持ち帰ってくる「えびフライ」という未知なる何かは、まず家族最優先で大切な〈宝＝父の愛情〉を愛でるのが重要だ、と言わぬばかりに。

★次に、えびフライを調理し、食する場面が続く。えびフライは父自身が揚げ、四人家族に六尾を、姉と主人公に二尾ずつ、祖母と父自身には一尾ずつ配分し、すぐ食べるようにと勧める。父が雑魚の串焼きを肴にビールを飲み始めると、そばつゆのダシを心配する主人公に、父は「わかってらあに」と「薄く笑」い「人のことは気にしねで、えびフライをじっくと味わって食え」と言う。

【読解ポイント⑪】**えびフライの配分と父の笑い**

えびフライのこの配分には、成長期の子供たちにより多く食べさせ、また喜ばせたいという父親の深い愛情が込められている。主人公のそばつゆに関する心配も父は十分に理解した上で、それが不要（すぐの帰京だから明日の夜の食事は不要）と承知しているので「薄く笑っ」たのだ。この場面の父の発言や接し方は、父の帰宅を喜ぶ子どもたちをガッカリさせたくないという、いかにも一家の大黒柱らしい思慮や対応といってよい。

★物語は、初めてのえびフライの食感や姉弟の食べっぷりを巧みに描写し、歯のない祖母がえびのしっぽを喉に詰まらせる場面を描き、第二場面の幕は閉じられる。

六、第三場面の読解ポイント

★翌日の午後、一家は「みんなで、死んだ母親が好きだったコスモスとききょうの花を摘みながら」共同墓地へ墓参りに出掛ける。母や祖父が眠るその墓は、「盛り土の上に、ただ丸い石を載せただけの小さすぎる墓」であった。

【読解ポイント⑫】一家の墓参り

共同墓地の一角にある「盛り土の上に、ただ丸い石を載せただけ」の「小さすぎる墓」は、貧しい暮らしが長く続く一家であることを物語っている。墓に手向ける花にしても、立派な花束ではなく、自生するコスモスや桔梗など道すがら摘んだ花々である。今の暮らしも苦しいからこそ父が出稼ぎに出ている。先の【読解ポイント⑩】でも述べたが、盆休みの帰郷はこの墓参りのためだともいえる。

【読解ポイント⑬】墓の遠近法／「小さすぎる」墓

一家の墓は実際に「小さ」い墓だと思われるが、「小さすぎる墓」との表現は、小学校三年生の主人公の認識とは思えない。十歳に満たぬ少年には墓の大小を比較する意識は乏しいはずだし、これが自家の墓だと大人たち（親など）から聞かされればそういうものだと受け入れるに違いない。「盛り土の上に、ただ丸い石を載せただけ」の墓を「小さすぎる」と感じるのは、それを貧しさや哀れさの象徴と感じる大人の認識であって、後年の「大人になった息子」の感懐が重なっての叙述であろう。ここには追憶の遠景をはるかに見やる作者の心情が色濃く、語り手である主人公の存在はむしろ希薄で書き手の望郷の念に伴う感傷的気分が墓の「小さ」さを際立たせ、「小さすぎる」との表現になったと思われる。これは「三」の【視点１】の〈語り〉の二重性とも重なる問題である。

★続いて、主人公の耳には墓を拝む祖母の念仏「なまん、だあうち」の間に「ふと、『えんびフライ……』という言葉がまじる」のが聞こえた。

【読解ポイント⑭】「えんびフライ」の〈空耳〉

主人公が祖母の念仏に聞いた「えんびフライ」の語をどう捉えるか。祖母の「言葉はたいがい不明瞭だが、そのときは確かに、えびフライではなくえんびフライという言葉を洩らしたのだ」とある。この断言を事実と考えるなら、昨夜のえびフライのあまりの美味しさに感激した祖母がその幸運を先祖に向かって感謝する言葉の一節ということになる。しかし、この「えんびフライ」の語が聞こえた主人公の〈断定〉は客観的根拠に乏しく、主人公の潜在的な欲求がもたらす主観ないし臆断が誘引した言葉とも考えられる。現に、本段落冒頭には「翌朝（今朝）、目を覚ましたときも、まだ舌の根にゆうべのうまさが残っていた」との述懐があり、これは主人公の内心を正直に吐露した言葉であろう。つまり、主人公は自身が魅了された「えんびフライ」の感動に今も浸っており、その意識が祖母の「不明瞭」な言葉に自身の潜在的欲求が反映して言語化された可能性が高い。これは祖母

の発した言葉というより、主人公の強い思い入れが生んだ〈空耳〉だったと思われる。彼の聞いた言葉が「えびフライ」ではなく「えんびフライ」と「聞こえた」こと、つまり〈訛り〉である事実が主人公自身の内なる声の発語であることを示している（注 11）。

★祖母の念仏から聞こえた「えんびフライ」の声（空耳）をきっかけに祖先の暮らしに想いを馳せた主人公は、亡き母がえびフライを食べたことがあったろうかと考え、「なんとなく墓を上目でしか見られなくなった」。一方、父は「少し離れた崖っぷちに腰を下ろして、黙ってたばこをふかしていた」。

【読解ポイント⑮】**主人公の〈上目遣い〉と父の〈距離〉**

〈上目遣い〉は一般に相手に対する引け目や照れから目を合せるのが憚られる際の仕草である。この場面で主人公に〈照れ〉はないので〈引け目〉を感じて墓を正面から見られなかったのだろう。つまり、自分たちはえびフライの美味しさを味わう幸運に浴したのに、そうした機会にも恵まれず、苦労続きのまま若死にした母にどこか〈引け目＝後ろめたさ〉を感じたのである。一方、墓前を離れて一人タバコをふかす父は、苦労をかけ続けで若死にした妻に対して誰よりも深い哀しみと悔恨を感じており、墓前に居たたまれず、涙も溢れかねぬ気持ちだったのかもしれない。そのため家族から一人離れて、心のうちの感情を鎮めていたと思われる。

★墓参りの日の夕方、主人公は東京へ戻る父を一人でバス停まで見送る。正月休みやドライアイスの話題で言葉を交わしたあと、二人は「黙って」停留所まで歩く。

【読解ポイント⑯】**父と息子の〈沈黙〉**

別れが間近に迫って募ってくる〈切なさ〉は、口を開けば感情が溢れ出し、涙もこぼれかねない。それを避けるために、二人は〈沈黙〉を守り続けている。

★バスが来ると、父は「んだら、ちゃんと留守してれな」と言って、息子の頭をわしづかみにして「いつもより少し手荒く」揺さぶる。

【読解ポイント⑰】**父の言葉と頭の揺さぶり**

当時の一般的な村落共同体における男系家族制度から考えると、父の言葉は、幼いながらも長男である主人公に対し、自分が不在の間は一家を守る家長として勤めを果たすようにと伝言したのである。その「いつもより」「手荒」い頭の「揺さぶ」りは父の愛しい我が子に対する期待の大きさとまだ少年の息子に重い責任をかける申し訳なさを表している。

★主人公は「頭」を「混乱」させる父の手荒な「揺さぶ」りのために「んだら、さいなら」というべきところを「うっかり『えんびフライ』と言ってしまった」。

【読解ポイント⑱】**「うっかり」の言葉か？**

主人公は父の手荒な頭の揺さぶりが言い間違いの原因であるように述べるが、そうではない。その言葉を「うっかり」「言ってしまった」とあるのは、頭の「混乱」した〈言い間違え〉ではなく、心の内に潜んでいた〈本音〉が思わず頭をもたげたということだろう。要するに、美味しかったえびフライの衝撃が父との別れの時にもなお主人公の脳裏に焼き付いていたことを物語る。想像を逞しくすれば、帰郷したばかりの父がすぐさま戻ってしまうその寂しさを堪（こら）えながらバス停までの道のりを歩く息子は、本当は父に「（驚くぐらい美味しいえびフライ嬉しかった。父ちゃん、ありがとう）んだら、さいなら」と言いたかったのかもしれない。だが、留守を預かる心細さと、しっかりしなければいけないと自らに言い聞かせる緊張感と、父に甘えたい想いと、一晩中ろくに眠らずに美味なえびフライを持ち帰ってくれた父への感謝と、様々な想いが綯い交ぜになっている中で「手荒く」頭を「揺さぶ」られ、思わず出てきた言葉が「えんびフライ」だったのではないだろうか。父が息子の言葉を耳にして「苦笑い」をするのは、息子の子供らしい〈本音〉の核心が理解できたからで、だからこそ細かいことを言わず「わかってらあに。また買ってくるすけ」と返答したのである。

★バスに乗り掛けた父が「まだ何か言いたげだった」が、車掌に促されて「何も言わずに、片手でハンチングを上から押さえてバスの中へ駈け込んでいった」。

【読解ポイント⑲】**「まだ何か言いたげ」な父の思い**

父は「まだ何」を「言い」たかったのか。作者は具体的に何も書いていないし、後の文脈にもそれを窺わせる記述はない。だから、父の「言いたげ」な「何か」の内容はひとまず不明と言うしかない。しかし、この場面は、父親が幼い息子や家族を残し、自家のある寒村を離れ、苛酷な労働現場であり、かつ華やかな都会でもある東京に再び戻るシーンである。愛する家族との〈別れ〉である以上、父の胸中に〈切なさ〉が浮かぶのは当然だが、作者が「まだ何か言いたげ」と記すだけでその内容を記さないのは、単なる〈別れの切なさ〉以上の〈内心〉を想起していたからであろう。父が呑み込んだ〈内心〉の言葉を推測し、以下に例示してみる。

（１）（息子の望むえびフライを）「買ってくるすけ……。」の「……」で略された部分、たとえ

ば（正月休みにはまた必ず買って帰るから）「それまでは良い子にして待っていろよ」という確認の言葉を呑み込んだ。

（２）「ちゃんと留守してれな」の言葉に続いて（お前は長男だから）「自分の留守中はしっかり家長としての役目を果たすように」という念押しの言葉を呑み込んだ。

（３）（１）と同じく「買ってくるすけ……。」の「……」部分だが、この沈黙には父の深刻な後ろめたさが潜んでいるのではないか。たとえば「（土産を）買ってくるすけ」の約束とは裏腹に、再びこの家には戻らないという断腸の思い、つまり〈永遠の別離〉を告げる言葉を呑み込んだ、との読解も考えたい。というのは、苛酷な現場で働くうちに都会に慣れた父は、その便利で華やかな世界に徐々に染まり、貧しい寒村に戻る苦痛に嫌気がさし、ほどなく失踪するのではないか、との読みである。

いずれも推論による読解例で、特に（３）などはやや強引な解釈とも思える。とはいえ、全く根拠がないわけでもない。たとえば和田論（注８参照）は、三浦作品には〈出稼ぎもの〉が18編あり、これらを「【Ⅰ】出稼ぎ者の家族の生活に焦点をあてた作品群／【Ⅱ】出稼ぎ者の閉塞した生活に焦点をあてた作品群」に整理し（同 p.59）、さらに【Ⅰ】の作品群が「〈農村生活→農村生活の変化→農村生活の崩壊〉という変容過程のどの段階を描いているかによって四分類される」と述べ（同 p.60～p.61）、その四種を順に【Ⅰ】－Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄとし、Ｄの三篇のうち「鳥寄せ」（『波』昭53/1978・７、岩波書店）では東京に出稼ぎに出た父が家に帰ることなく裏山で首を吊り、「付添い」（『波』昭54/1979・３、同）では父親が東京に出稼ぎに行ったきり行方不明になる物語とする（同 p.63）。つまり、作者三浦の脳裏には〈出稼ぎ〉による父の失踪や家庭崩壊というシナリオも想定されており、また現実にもそうした前例が少なくなかったことを和田論（注８）は論じ、黒田／幾田論（注12）が新聞記事の実例を挙げている。したがって、「盆土産」も物語の終幕後に父が失踪するかもしれず、この読解例（３）の可能性も皆無とはいえない。その場合、主人公の脳裏に鮮烈なインパクトを刻んだ「えんびフライ」は、失踪した父の忘れ形見として記憶に残る〈置き土産〉だったことになる。「盆土産」の回想の先にはそんな哀しいドラマが想起されていたとも考えられる。

★物語末尾の一行前には「何も言わずに、片手でハンチングを上から押さえてバスの中へ駈け込んでいった」父の姿が描かれる。

【読解ポイント⑳】**父の後ろ姿**

無言でバスの中へ「駈け込んで」ゆく後ろ姿の父は、見送る息子に対して再会へと繋がるはずの「さいなら」の言葉を発しない。父のこの沈黙と後ろ姿からはむしろ振り返るまいと自身に言い聞かせ、ひそかに〈永遠の別れ〉を内心に抱えて去ってゆく印象を醸し出す。少なくとも（〈永遠の別れ〉でなくとも）振り返ってしまうと涙が溢れそうになるのを堪えるために無言でバスの中へ「駈け込んで」いることは想像に難くない。この父は果たして次の正月休みにえびフライを土産に再びこの村に戻ってくるだろうか。筆者には父のこの後ろ姿から土産を片手に村に戻ってくるイメージがどうしても浮かんでこない。

山間の寒村を舞台とする生活の厳しい〈出稼ぎ〉の物語は、「はい、発車あ」という感情を押し殺したような男性車掌の「野太い声」で幕切れとなる。父の思いや家族のさまざまな感情を押し込める物語の幕切れには、男性的な力強い「野太い声」の封印が相応しい。

ま と め

以上で、ひとまず「盆土産」読解の試みを終える。ただし、〈教材的読解〉の制約を解いた本稿の〈文学的読解〉は、ややもすると〈教室〉にそぐわない読解例とも見られよう。特に【読解ポイント⑲】後半の読解例（３）以降や【読解ポイント⑳】の言及などは本文の叙述を超えた〈深読み〉で、教材対象の中学生には理解しにくいと思われるかもしれない。しかし、こうした〈深読み〉も教材理解の掘り下げに繋がり、援用の仕方次第では文学教材の発展学習として授業におけるスパイス（刺激）となり、読解の幅を拡げ、授業に深みをもたらす一助となり、あるいは生徒同士の活発な議論を呼ぶ（アクティブ・ラーニングの）材料となる可能性もある。また、教材的読解に収まらぬ個性的な感性を持つ生徒には、そうした読解もありうることを示すことにもなろう。その意味では、本稿は教材本文の文脈を押さえた上で、自由な想像力の涵養や生徒の主体的な〈読解能力〉の向上を目指す文学教材本来の目的に適うものともいえる。教材という〈制限〉をあえて没却し、〈文学的読解〉を試みた理由である。

【注】

（注１）リズール（Liseur、精読者）の対語はレクトゥール（Lecteur）で一般的な読者（鑑賞者・消費者）を意味する。A. チボーテ『小説の読者』（白井浩司訳、ダヴィッド社、昭32/1957・９、p.28～34）等を参照。

（注２）三浦の略歴は『昭和文学全集　第23巻　吉田健一　福永武彦　丸谷才一　三浦哲郎

古井由吉』（小学館、昭62/1987・９）巻末の自筆年譜「三浦哲郎年譜」を参照。

（注３）黒田俊太郎・幾田伸司「『盆土産』（三浦哲郎）教材研究のための覚え書き」（「語文と教育」32号、平30/2018・９、p.12）に「『盆土産』には、社会状況の中での地方の一家族の姿、都会と田舎の対比、生者が死者に向ける思いなど、父と家族との交流に収まりきらないいくつもの話題が伏在」するとの指摘がある。ただし、論稿中にそれらを具体的に掘り下げた言及はない。

（注４）加藤郁夫「『盆土産』（三浦哲郎）を読む ―二層に重なる物語―」（「月刊　国語教育」312号、東京法令出版、平18/2006・７、p.64参照）

（注５）昌子佳広「文学教材『盆土産』（三浦哲郎）の教材研究―「語り」の問題とその教材性―」（「茨城大学教育学部紀要（教育科学）」60号、茨城大学、平23/2011、p.9～15参照。刊行年月は記載されていないが、論文の受理が「2010年11月30日」とある。）

（注６）注３、p.14参照。

（注７）北岡誠司・三野博司編『小説のナラトロジー　主題と変奏』（世界思想社、平15/2003・１所収）田畑雅英「２　回想と現在―大岡昇平『野火』―」p.36～37参照。

（注８）和田悦子「三浦哲郎短編小説論 ―〈出稼ぎもの〉における〈崩壊〉の構図―」（「文月」２号、文月刊行会〔大阪教育大学大学院〕、平９/1997・４、p.58～69参照）が三浦作品における出稼ぎを論じ、日本の家（家族）の崩壊等にも注目している。

（注９）黒田・幾田論（前掲注３）にも言及はあるが、特に和田論（注８）は、副題にあるように、三浦の短編作品群から〈出稼ぎもの〉を抽出・整理し、出稼ぎの〈行く末〉にも注目、その意味を詳細に論じている。

（注10）以下、出稼ぎや農政については「農村政策を中心とした戦後農政の流れ（農村振興局、令２/2020・５・19、農林水産省）、「農業基本法に関する研究会報告」（平８/1996・９、農林水産大臣官房企画室）、川越俊彦「戦後日本の農地改革」（「経済研究」Vol. 46, No. Jul. 1995. 一橋大学、p.249～259参照）、“A Digital Cultural Resource of the US-Japan Conference on Cultural and Educational Interchange”（CULCON）等を参照。

（注11）前掲（注４、p.63～64）参照。加藤は「えんび」の発音が「祖母の中にある田舎を見ること」で、「それは自分（主人公）の中にある田舎性に気づくこと」だと指摘する。しかし、主人公の「えんび」の発音を直そうとする姉は、「ザッコ」を「ジャッコ」と訛

るものの、「えびフライ」は正しく発音したと思われ（間違っていれば主人公の弟が指摘したはず）、祖母の発声がどうかは不明だが、「えんびフライ」と発声したとの明確な記述も本文にはない。とすれば、「えんびフライ」の語は誰よりも主人公自身の表徴だといえる。つまりは、彼は自身の内なる声を耳にしたのである。

（注12）前掲（注３）の論内〔注12、p.21〕に「読売新聞」等の記事が掲げられている。